

批判理論と戦争協力

東京大学大学院 馬渡玲欧

1 目的

本報告はフランクフルト学派第一世代として知られる H.マルクーゼが第二次世界大戦中に書いた、一見「客観的」に見える戦略情報局（OSS）報告書の記述から、彼の批判理論のモチーフを析出し、批判理論の「客観性」と経験的探究について考察することを目的とする。

2 方法

Laudani は、マルクーゼ、ノイマン、キルヒハイマーは、第二次大戦中、OSS の Research & Analysis 部門、つまり「科学的に客観的で中立的」な政策形成を指示する官僚組織内で、フランクフルト学派が保持していた「哲学的・理論的」な観点を放棄する必要に迫られたと述べる（Laudani 2013: 7）。特にマルクーゼは思弁性を出さず、ノイマン『ビヒモス』の分析に近いレポートを書いていた（Laudani 2013: 8）。しかし、Laudani が述べるところの「哲学的・理論的」で無いとされるマルクーゼのレポートには、後年の『一次元的人間』の管理社会（administered society）論を思わせる記述がいくつもあると報告者は考えている（特に「行政/管理」administration や「統制」control）。本報告では、*Secret Reports on Nazi Germany* に収録されている Nazi Plans for dominating Germany and Europe: The Nazi Master Plan（1945年7月）を取り上げる。

3 結果・結論

同レポートの目的は、NSDAP によって策定されたヨーロッパ及びヨーロッパを超えた侵略・占領・支配の計画について論証することにある。マルクーゼによれば、NSDAP は公的・私的生活の全領域にわたる全体主義的統制（control）を 1933 年以降打ち立てる。その際、政治、イデオロギー、人種、宗教的なすべての反対勢力の一掃やメディア、教育、福祉、行政機構への際限の無い統制が伴うとマルクーゼは述べる。例えば、メディア統制がほぼ完璧だったことにマルクーゼは着目する。1933 年 10 月に制定された編集者法が重要な役割を果たしたこと、そしてこのメディア統制と同様の統制が教育の領域でも行なわれていたとマルクーゼは考える。ここでは 1936 年 12 月制定のヒトラー・ユーゲント法が取り上げられている。以上のドイツ国内の全体主義的統制の確立後、次に侵略戦争のための「総力をあげた」準備に NSDAP は着手する。ここでマルクーゼはヴェルナー・ベストの議論に触れながら、行政（administration）について比較的多く紙幅を割いている。NSDAP の占領政策における「行政」は占領地での暴力的な政治・経済の統制を必然的に伴うものであった。

後年の『一次元的人間』（1964 年）と比較して、確かに扱われているトピックは異なるものの、根本的なマルクーゼの関心は OSS でのレポートと共通していると報告者は考える。特にマルクーゼの統制や行政といった用語・概念の使い方は、決して Laudani が述べるほど非思弁的、強く言えば「客観的」とまでは言えない。もしかするとマルクーゼは職務上の要請から「経験的なもの」を客観的に記述しようとしていたかもしれないが、第二次大戦（という経験）を基にした報告書の記述において選択され、適用された用語・概念の布置連関からは、後の管理社会論へと展開する理論的視角が浮かび上がってくるように思われる。

文献

Laudani, Raffaele, 2013, "Introduction," Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 1-23.